

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （簡条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （簡条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方針 （簡条書きで良く、参考資料は不要）
教務委員会	教務委員長（兎川忠靖）	<p>(1) 教務委員会の小委員会である国家試験・CBT対策委員会、学生実習委員会、学内実務実習委員会、学外実務実習委員会、コース特別実習・演習委員会、早期体験学習委員会、マルチメディア教育委員会、FD委員会、CBT実施委員会、OSCE実施委員会、臨床検査技師教育運営委員会とともに、教務課および実務実習支援課が連携を取りながら、学部学生に対する教務が円滑に実施できるよう、運営している。</p> <p>(2) 学部学生に関する①教育に係る規程の制定及び改廃、②教育課程及び履修方法等、③学部関連行事、④大学入学者選抜と学部教育との連携、⑤高等学校教育との連携、⑥他大学等との教育連携、⑦社会と連携する学部教育、⑧編入学、再入学及び転科、⑨科目等履修生及び研究生等、⑩非常勤講師、などの教務に関する事項について対応している。</p> <p>(3) 教務オリエンテーションは各学年において年間2回、留年生・卒延生オリエンテーションは年1回ずつ実施し、履修登録、単位認定基準及び進級要件等について周知徹底をしている。特に、4年次・6年次は共用試験または国試対策等について説明を実施している。</p> <p>(4) 留年生・卒延生については、アドバイザーとなった担当教員が年間3回程度の面談を行い、学習への取り組み状況を確認しながら、支援をする。</p> <p>(5) 前期・後期の終了時には、授業アンケート、学修時間・経験、学修成果等に関するアンケートを実施し、学生自身の到達度等について調査をするともに、講義担当教員に対する評価も実施している。</p> <p>(6) 学生や保護者から教務に関する事項における面談希望があれば、随時、対応し、履修状況等の支援を行っている。また、適宜、学生支援課とも情報共有を図りながら、対応している。</p> <p>(7) 2021年度はコロナ禍による感染拡大防止対策として、必須科目を中心として、2020年度に整備したハイブリッド講義システムを利用して、遠隔双方講義を行うとともに、収録した講義ビデオをMY-CASTで配信した。実習については、感染拡大防止対策を十分に行いながら、一部オンライン実習も含めて実施した。また定期試験や追再試験をはじめとする各種試験は、感染拡大防止対策を十分にとり、対面にて教室の収容人数を減じうえで実施した。</p> <p>(8) 基礎教育支援として、例年、数学・物理・化学分野においては、特任教員による学内での対面による質疑応答を行っていたが、2021年度はコロナ禍により学生の登校が大きく制限を受けたため、十分に実施できなかった。</p> <p>(9) ヒューマンズ教育・医療倫理教育・問題解決能力の醸成に向けた教育においては、目標達成度の評価指標が設定されていなかったが、担当教員と協議を行いながら、段階的に改善策を実施しており、2021年4月より「人間関係論」、「卒業研究Ⅱ」でルーブリック評価を開始した。</p> <p>(10) 講義・演習科目の科目ナンバリングを実施し、学修の段階や順序等を明示した。</p> <p>(11) 再試験受験者と本試験合格者との間で不平等な成績判定となることが懸念されていたため、改善策について協議した結果、2022年4月より、再試験の成績評価の上限を69点に変更することとした。</p>	<p>(1) 本学における学部学生に対する教務活動は、3ポリシーに沿って、概ね適切に実施されている。</p> <p>(2) 4月から実施したハイブリッド講義・演習は、学術情報課のご支援のもと、順調に実施することができた。また、実習においても、担当教員が感染対策を十分に行い、学内クラスターを発生させることなく、実施できた。</p> <p>(3) 2023年度からの入学者に対する3クラス制から4クラス制への移行を円滑に行う必要がある。</p> <p>(4) 平準化に伴い、生命創薬科学科・薬学科の卒業研究を指導する担当研究室を拡充し、運営体制を整備する必要がある。</p> <p>(5) 2024年度からの改訂コアカリキュラム導入に向けて、薬学科・生命創薬科学科のカリキュラムを見直す必要がある。</p> <p>(6) 臨床検査技師教育のあり方については、2022年度入学者から新たなカリキュラム方針で履修する必要があるため、関係者で検討を行う必要がある。</p> <p>(7) CBT合格率・国試合格率・ストレート合格率を高めるために、成績のふるわない学生に対する支援体制を整備する。</p>	<p>(1) withコロナとして、講義等が対面形式で実施できるよう、準備を進める。</p> <p>(2) 2023年度からの入学者に対する3クラス制から4クラス制への移行を円滑に行うため、時間割編成等を進めていく。</p> <p>(4) 大学院の平準化に伴い、生命創薬科学科・薬学科の卒業研究を指導する担当研究室を拡充し、運営体制を整備する必要がある。</p> <p>(5) 2024年度からの改訂コアカリキュラム導入に向けて、改訂コアカリキュラム策定の動向を注視しながら、薬学科・生命創薬科学科のカリキュラムの見直しを開始する。</p> <p>(6) 臨床検査技師教育のあり方については、2022年度入学者から新たなカリキュラム方針で履修する必要があるため、関係者で検討を行う必要がある。</p> <p>(7) CBT合格率・国試合格率・ストレート合格率を高めるために、成績のふるわない学生に対する早期からの支援体制を整備する。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
学内実習委員会	学内実習委員長（横屋正志）	<p>(1) 学内実習委員会を中心に、教務課と連携を取りながら実習が円滑に遂行されるよう支援をおこなっている。</p> <p>(2) 実習に関する支援として、①実習日程の作成、②実習実施方法の策定、③実習欠席者の調査、④実習用購入機器の選定、等をおこなっている。</p> <p>(3) 令和2年度はコロナ禍により学生の登校が大きく制限された。この状況下、本学では、シラバスに記載している学習内容を完遂するために、実習動画や新たな資料を作成し、オンラインを活用することとした。その結果、前期は自宅からのリモート学習で実習を実施し、後期は少人数に分け短時間で実習をおこない平時の実習内容を網羅した。</p> <p>(4) 実習活動は班員同士のコミュニケーションが重要であり、コロナ禍においては、感染対策が重要となる。各実習室への消毒用エタノールを配布するとともに、継続的な注意喚起をおこなった。</p>	<p>(1) 本学における実習活動は概ね適切に実施されている。</p> <p>(2) コロナ禍の影響で、例年通りの人数を集めての実習実施は感染対策の観点から困難である。そのため、本学では例年の半数に分け実習をおこなった。その結果、実習日程の確保が困難になっている。</p> <p>(3) オンラインを活用し、リモート学習で実習を実施したが、その学習効果について検証が必要である。</p>	<p>(1) コロナ感染症の社会的状況を見ながらには成るが、感染症対策を講じたうえでコロナ禍前の実習実施状況へと徐々に戻していく必要がある。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
薬学情報委員会	薬学情報委員長（浦辺 宏明）	<p>（1）薬学情報委員会を中心に、図書館・資料館運営委員会や出版員会の小委員会、学術情報課および図書館と連携を取りながら、大学からの事業報告、学術成果などの情報発信や学術雑誌などの情報受信を管理した。</p> <p>（2）図書館管理・運営として、コロナ禍における学生への図書館サービスの充実、開館時の感染予防対策を行った。</p> <p>（3）資料館管理・運営として、教材を各家庭に配布する新たな企画で、コロナ禍で対面実施ができなかった子供イベントを行った。</p> <p>（4）出版業務として、大学広報、研究紀要の出版を滞ることなく実施した。</p>	<p>（1）コロナ禍の中においても、図書館サービスの充実により、良好な学習支援が行えたと思われる。</p> <p>（2）子供イベントに関しては、定員を超える申し込みがあり、全てに対応するなど、受講者から高い評価を受けた。</p> <p>（3）本委員会は、おもに在校生、保護者、一般人を対象としているが、学内には、受験生を対象とした入試広報委員会があり、大学情報発信が多岐にわたっている。</p> <p>（4）様々な部署が担当する講演会やイベントが行われており、教職員の業務負担からも窓口を統一化する必要がある。</p> <p>（5）大学ホームページを管理・運営する委員会・組織が無く、今後の情報発信強化に問題が見られる。</p>	<p>大学における情報管理を統合し、インターネットを介した情報発信を強化することを目的として、本委員会は2021年度を持って、廃止となり、すべての大学情報を一元化した大学広報委員会に改編された。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （簡条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （簡条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （簡条書きで良く、参考資料は不要）
早期体験学習委員会 （見学学習部門）	見学学習部門長（川北 晃司）	<p>(1) COVIDの十分な収束が見通せない中、見学学習の学外実習は2022年度も中止となった。</p> <p>(2) 今回の見学中止連絡は前年度よりも早めに（見学受け入れ依頼前に）施設側に行われたので、各施設に大きな迷惑をかけずに済んだものと思われる。</p> <p>(3) 薬局薬剤師の仕事紹介ビデオ（そうごう薬局制作）のアップデート版（本学用2022年度版）を「薬学への招待」授業中に鑑賞させ、感想文を提出させた。その後、感想文のダイジェスト版をお礼として、今年も、ビデオ制作者（そうごう薬局）に提供した。</p> <p>(5) 「医療倫理」授業において、早期体験以前に学生が理解すべき基本概念について解説した。</p> <p>(6) 防衛医科大学校・明治薬科大学合同IPE委員会が主催する、防衛医科大学校医学科・看護学科1年生とのIPE(多職種連携教育)に本学薬学科1年生全員をリモート参加させ（2022年8月）、学生はレポートを提出、両大学の教員からフィードバックが行われた。</p> <p>(7) 生命創薬科学科1年生にとっては、選択科目である「薬学への招待」における単元としての「早期体験学習」を昨年度までは履修できたが、2022年度からは「薬学への招待」の単位が生命創薬科学科生は1単位（昨年度までは2単位）に変更されたため、生命創薬科学科生は早期体験学習に参加しないことになった。</p>	<p>(1) 本年度も見学学習は学外実習を実施することができなかったが、早めにその判断が下されたのはよかった。</p> <p>(2) 代替措置を新生入生に提供できた。</p> <p>(3) 来年度からは委員会の正式名称が（IPE関連が加わり）変更されると思われるので、それに伴い諸々の変更も必要になると予想される。</p>	<p>(1) 来年度の見学学習に関して、附属薬局への見学を再開させていただく方向で検討されている。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
コース特別実習・演習	兎川忠靖	<p>令和3年度は海外医療研修コース以外のコース特別実習（病院薬学、地域医療、臨床開発、健康薬学、伝統医療薬学、薬学研究A・B）を再開・実施したが、いくつかのコースでは感染症対策として、内容の変更を行った。</p> <p>病院薬学コース55名、地域医療コース47名、臨床開発コース34名、健康薬学コース23名（一部オンライン実習）、薬学研究Aコース52名、薬学研究Bコース42名であった。</p> <p>海外医療研修コースには15名が参加したが、国内外での新型コロナウイルス感染症の状況を鑑み、学生の安全を考慮し、Web会議システムを使ってカナダ、イギリス、タイの学生との交流、講義、課題発表などを行うオンライン留学を行った。</p>	<p>感染症による影響が実習依頼先により、かなり異なる対応を希望されることから、同じコースではあるが、学生間により実習内容に差が出る場合があり、評価の点が難しくかった。</p>	<p>ワクチン接種が進み、次年度はかなり通常に近い実習が組めると予想されるが、それを踏まえて、大学の担当教員も積極的に実習先担当者との連携をはかる必要がある。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
CBT実施委員会	CBT実施委員長（植沢芳広）	<ul style="list-style-type: none"> (1) 薬学共用試験センターと連携を取りながらCBT実施方針策定した。 (2) CBT実施委員からCBTモニター員を選出し、担当校におけるCBT各試験に対応した。 (3) CBT各試験における実施要領を策定した。 (4) CBT各試験における学生向け説明会を開催した。 (5) CBT各試験における監督者向け説明会を開催した。 (6) CBTにおけるコロナ感染対策を実施した。 (7) CBT関連サーバーの管理運営を行った。 (8) 薬学教養試験センターの開催するCBT実施及びモニター説明会に参加した。 (9) 本学におけるCBT体験受験、本試験、追再試験を実施した。 	<p>自己評価</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 本学におけるCBT体験受験、本試験、追再試験を適切に実施した。 (2) コロナ感染対策として種々消毒等とともに、密を避ける目的で体験受験および本試験の試験期間を2日から4日間に変更した。 	<p>概ね良好に実施された。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
OSCE実施委員会	OSCE実施委員会委員長 （山崎 紀子）	<p>(1) 薬学共用試験センター主催の全体説明会に参加し、その報告を兼ねて年度初めにOSCE実施委員会を開催し、OSCE模擬試験開催有無、実施形態、運営方針など検討した。</p> <p>(2) 薬学共用試験センターの通知に従い7/23に「模擬医師養成講習会」を開催した。病院・薬局薬剤師31名が参加しOSCE実施委員会委員により模擬医師養成を行った。</p> <p>(3) 8月に通知された課題に基づいて、課題責任者を中心に実施計画をたて直前講習会及び本試験の準備を行った。</p> <p>(4) 病院・薬局薬剤師に外部評価者募集を行い40名に依頼した。10/29に外部評価者養成講習会ならびに直前講習会を行いOSCE実施委員会課題責任者が課題説明、対応を行った。</p> <p>(5) 学内教員に関しては、評価者養成講習会（10/29）、SP講習会（11/21）、評価者・SP直前講習会（11/25）を開催し、OSCE実施委員会委員が各担当業務の説明、対応を行った。</p> <p>(6) OSCE本試験（12/3）に向け、委員全員で数日前より会場設営を行い、本試験当日は適正・公平な試験が行われるように事前準備を行った。</p> <p>(7) OSCE当日は委員会委員主導で、全教職員の協力をえて適正・公平な試験が行うことができた。</p> <p>(8) OSCE追再試験に向け、適正・公平な試験が行われるように準備を進めている。</p>	<p>(1) 本年度も問題なくOSCEを実施することが出来た。これもOSCE実施委員会による事前準備と当日の運営の成果と考える。もちろん、外部評価者ならびに教職員全員の協力があったことである。</p> <p>(2) コロナ禍で対面による打ち合わせがあまり出来なくても、それぞれの役割を責任持って行うことが出来たと考えている。</p> <p>(3) 委員間の情報共有において小さなニュアンスの相違が生じないように状況をみながらの対面会議も大切であると感じた。</p>	<p>(1) 状況により対面の委員会を開催し、学内教員（評価者、SPなど）への伝達事項に齟齬が生じないように委員会内での情報共有事項を確認する。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 (簡条書きで良く、参考資料は不要)	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 (簡条書きで良く、参考資料は不要)	③次年度の改善方策 (簡条書きで良く、参考資料は不要)
マルチメディア教育委員会	マルチメディア教育委員長（高取和彦）	<p>(1) 教務委員会の授業支援に関するシステムの要望をマルチメディア教育委員会が受けて運営方針を策定し、情報教育研究センターがシステムの導入・運用及び授業のサポートを行っている。</p> <p>(2) 2020年度はオンデマンド授業に備えて動画配信サーバの増強、また、ハイブリッド授業及び授業収録ができる講義室を全体の6割程度整備した。しかしながら、ハイブリッド授業における機材トラブルが度々起こり、都度空いている講義室へ変更する対応を行っていたが、空き講義室にも限界があり、2021年度は全講義室においてハイブリッド授業及び授業収録できる機材を導入した。令和3年度の授業は科目によってハイブリッド授業とオンデマンド授業を実施したが、ハイブリッド授業でも全て録画し、後日オンデマンド配信を行った。その目的は、学生の自宅環境のWi-Fiの電波状況が悪く、音声・映像が途切れるケースがあり、その学生をフォローするため、また、授業の復習に活用するためである。</p> <p>(3) 2019年度から3ヶ年計画で講義室の老朽化したプロジェクターを更新しており、2021年度はその最終年度として更新を完了した。更新したプロジェクターは全て光源がレーザであり、光源耐久時間が20,000時間とこれまでの水銀ランプの10倍長く、また起動時間も10分の1程度に短縮された。</p> <p>(4) 実習棟7室のワイヤレスマイクは電波法関連法令 無線設備規則の改正に伴い、2022年11月までに更新する必要がある、2021年度は実習室2室を更新した。</p>	<p>自己評価</p> <p>(1) 日常業務における授業支援は概ね適切に実施されている。</p> <p>(2) MY-CASTのサーバにアクセスが集中するとサーバダウンが起き、一度ダウンすると5分程度接続できなくなっていたが、負荷分散の設定を見直して解決できた。</p> <p>問題点</p> <p>(1) 授業動画の本数が多く、学術情報課の編集作業が多忙である。</p>	<p>(1) 学術情報課の誰もが編集作業ができるように全員に動画編集スキルを身に付けさせる。</p>
情報教育センター運営委員会	情報教育センター運営委員長（高取和彦）	<p>(1) 情報教育センター運営委員会で運営方針策定し、情報教育研究センター長を中心に学術情報課が教育・研究に関するインフラを整備・運用している。</p> <p>(2) 研究棟の無線LANアクセスポイントの移設・増設工事を行った。2020年度より、コロナ禍による遠隔授業へのシフトにより研究棟でも学生・教員のインターネット利用の需要が高まっている。しかしながら、学生は入学時に購入したノートPCを利用するため、必然的に無線LANを使うが、2018年の無線LAN構築時はそこまでの需要を見越していなかったため、研究室の隅々まで電波が行き渡る設計にはなっていなかった。</p>	<p>自己評価</p> <p>(1) 日常業務においては概ね適切に実施されている。</p> <p>問題点</p> <p>(1) 無線LANのアクセスポイントの予備機を研究棟の無線LANアクセスポイントの増設工事に利用したため、本学の予備機の在庫がなくなった。しかしながら、半導体の供給不足によりメーカーに在庫がなく予備機の入手が出来ず、在庫0の状態である。</p>	<p>(1) 現在の無線LANアクセスポイントのメーカー以外でも導入できるようにネットワーク構成を見直す。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
臨床検査技師教育運営委員会	臨床検査技師教育運営委員長 （矢久保 修嗣）	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床検査技師国家試験に向けた支援（模擬試験や国家試験出願等）。 ・学内実習である臨床検査総合実習及び医療安全管理学実習の計画と運営。 ・学外の病院実習の受入調整や学生のサポート等。 ・令和4年度入学者から適用される臨床検査技師国家試験資格を得るための教育内容の改正に伴うカリキュラムや臨地実習などの検討。 	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床検査教育は概ね適切に実施されている。 ・令和4年度入学者からの教育内容改正に伴うカリキュラム等について、時間割や臨地実習等多くの検討事項がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他の委員会等と協力し、時間割や臨地実習等に向けて調整を行う。また、日本臨床検査学教育協議会から提供される情報を有効に活用することで、臨床検査教育の充実を図る。

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
大学院FD委員会	大学院FD委員長（紺谷園二）	<p>1) 令和5年3月15日（水）午後1時から約1時間程度、片桐 大輔 先生（千葉大学学術研究・イノベーション推進機構（IMO）特任教授）に「大学発イノベーションへの期待」というタイトルで御講演頂き、その後、大学院担当教員による質疑応答を行う予定である（午後2時半頃まで）。</p> <p>2) 大学院担当教員は全員参加とする（退職教員を除く）</p>	<p>テーマの選定に関しては、前年度および前々年度のテーマとは異なる趣の題材を取り上げ、内容が偏ることのないよう配慮できた。</p>	<p>取り上げるテーマについては、委員会のメンバーだけでなく、様々な大学院担当教員との情報交換を適宜行うことで、多様なテーマに取り組めるようにする。</p>